No. 1092

'74 にっぽん

30年目の断絶

フィリピンルバング島で救出された元日本兵、小野田寛郎元少尉（51才）は、三十年ぶりに戦いを終えて、3月12日午後4時30分、日航特別機で羽田空港に帰えってきた。小野田さんの目に30年の日本の変貌はどう映っただろうか。

日本の空を網の目のように飛びかうジエット機、狭い国土を、埋めつくす車の洪水、そして、日本繁栄のシンボルだった新幹線。

軍事大国から経済大国へと繁栄に向ってまい進してきた日本の国策、今、繁栄のためにたえず優先されてきた公共性は住民の環境権のまえにその行手を阻まれようとしている。

社会復帰した小野田さんは、自らが背負いつづけてきた肩の荷をひとつひとつおろすかのように頭を下げ続けた。

戦後29年、いまだ日本は平和ではない。原子力の平和利用をめざす政府、そして、核の恐怖におののく市民。安全性が確立されていない原子力船「むつ」の出港に陸奥湾漁民の怒りは爆発した。漁民の阻止行動のスキをつき、強行出港したものの、放射線漏れ事故を起し、大平洋上を50日間も漂流しなければならなかった。

靖国神社を訪れた小野田さんは、戦友に自らの非を詫び、その霊の安らかを祈る。

白昼の平隠を、一瞬のうちにうち破った大爆発。誰が何のために爆弾を仕掛けたのか、死者8人、重軽傷者300人を超える大惨事となった。三菱重工ビルにはじまった爆発事件はその後、三井物産、大成建設へとエスカレート、今なお、その犯人はつかまっていない。

桜満開の紀州路をたどった小野田さんは、三十年ぶりに故郷、和歌山県海南市にある我が家へ帰えった。そこでも父母に許しを乞うかのように頭を下げた。

故郷の土、その国土は、悠久の時の中で、少しずつ、むしばまれ荒廃を続けている。明治43年以来、平隠に流れ続けていた多摩川は、50年ぶりに決壊、流失家屋は11戸を数えた。

さらに、伊豆半島沖合でマグニチュード6.8を記録する地震が発生、太平の夢を打ち破った。平和な民宿の村は一瞬にして地獄と化した。

今や何を語ることもできない戦友の墓、小野田さんは、何を報告し、何を祈っただろうか。

繁栄の中で、たえず犠牲になってきた弱者たち。ベッドに寝たままゆがんだ指でレースを編み、なえた足で米をとぐ。

福祉行政のたち遅れの中で、人間らしく生きたいと願う重度障害者の姿がある。福祉大国への遠い道程を感じさせる日本の現状。

小野田さんが国に捧げ、そして戦地にすごした青春。

今、若者はロックに狂い、やり場のない若さのエネルギーを爆走にたくす。ストリーキング。モナリザ、ダービー人々はせつなの現に夢を託す。そして、つかの間の喜びに酔い知れる。

小野田さんが命を捧げた軍国日本は、今や亡国日本へと突っ走ろうとしている。人間ジャングルを逃れるかのように小野田さんは日本を去った。十一月のある日、一陣の爆音だけを残して。